

セッション報告「批判理論の歴史と現在」

世話人 宮本真也（明治大学）

本セッションはアクセル・ホネット（コロンビア大学）の論文集『理性の病理—批判理論の歴史と現在』（出口剛司／宮本真也／日暮雅夫／片上平二郎／長澤麻子訳、法政大学出版局、2019年）の邦訳の公刊をきっかけに企画、開催されたものである。登壇者は、宮本（司会進行・討論者）、出口剛司（東京大学大学院人文社会系研究科准教授・討論者）、成田大起（早稲田大学政治経済学学術院・報告者）、徳地真弥（一橋大学社会学研究科博士課程後期満期退学・報告者）の4名である。また、規模としては40名ほどの参加者が集まった。

まず、宮本によって、ホネットの経歴と研究についての概略が示されたあとで、『理性の病理』の原著が発表された時期とその特徴について説明が行われた。一九九〇年代前半までの理解では、ホネットはハーバーマスの後継者として、コミュニケーション論的転回を評価し、いわゆるフランクフルト学派の第一世代と目されるM・ホルクハイマー、Th・W・アドルノの社会理論の袋小路には強い批判的態度を取ると見なされていた。しかしながら、その後、ホネットは、ア

ドルノの読み替えを試み、コミュニケーション的理性とも異なる理性のあり様（模倣的理性）を模索している。こうした転換が色濃く反映されていることが、本書の特徴のうちの一つである。

続いて、出口によって「〈社会的なるもの〉を内側から捉えること」と題して、本書の位置づけと内容についての説明が行われた。出口が特にここで強調した本書の特質は二つある。一つはこの著作が、アクセル・ホネットが批判理論の拠点として開始されたフランクフルト社会研究所の所長に就任する時期に執筆された論考を集めたものであるという点である。それゆえ、批判理論の遺産を明らかにし、それらを発展的・批判的に継承することを目的としている。もう一つの特質は、〈社会的なもの〉を経済的な利害を鑑みて外的な目的一手段関係に還元してとらえるのではなく、むしろ歴史過程の内側や、主観の内側から模索している点である。こうした着眼点から、さらに各章についての説明が試みられた。

続いて成田からは「ホネットによる批判理論の再生：鍵概念としての社会的病理」と題した報告がなされた。この報告において成田はまず、ホネットが批判理論を再生するための鍵概念として示す「社会的病理」の概念を明確にし、彼がどのように現代社会の病理を批判しているかを確認し、その妥当性を検討した。報

告者の結論によれば、社会的病理は社会批判のために有効な概念装置であり続けているものの、ホネット自身の病理診断には問題点があるという。というのも、病理診断の基準が歴史的・規範的な「進歩(Fortschritt)」という問題含みの概念によって根拠づけられているからであるとした。

第二の報告者である徳地は、「不安、内面の自由、民主主義」をテーマに、主にホネットの著作の第7章から9章までの内容について議論を展開した。まず、徳地は「ホネットはどのようにフロイトの精神分析を読み替えたか」、「内面の不安と民主主義の関係はいかなるものか」という問いを立てながら、各章の説明を試みた。それを踏まえて徳地は、ホネットが精神分析をめぐってJ・ホワイトブックとのあいだで行った論争からの展開についても言及した。徳地によると、ホネットは新たに不安の人間学的前提を明らかにすることを本書で試み、そのことによってホネットが承認論の「形式的」人間学の構想の内実を豊かにしたという。内面の不安からの解放が、民主的な意思形成に反省的にかかわる能力の発揮につながり、自己実現に到達するという解釈にホネットはいたっているという解釈を行っている。

討論者として出口はまず、成田の報告に対して二つの点で疑問を述べた。社会

学者として出口は、社会学の課題を主に社会問題や社会現象を記述することにあるとし、その立場から見れば、政治哲学や思想の観点から成田が示す規範と事実、現象と基礎づけ（または正当化）についてのリジッドな区別は強すぎて、経路依存の傾向に陥っているという印象を抱いたと述べた。また、ホネットが『物象化』で取りあげる、3つの承認形式に先立つ承認という考え方を、どのように考えればいいのかを問いとして立てられた。

また、出口は徳地に対して、フロイトが語る人間の「強さ」（自我の強さ）と、彼が語る「生き生きとした人間像」は、異なるものではないか、という問いを投げかけた。出口の理解にしたがうと、ホネットがフロイトから導き出す「生き生きとした人間像」の「生き生きとした特性」は、現代の社会学において「レジリエント（復元力）」、すなわち「まざまな選択肢を自分のなかに持っている特性」ではないかという解釈を示した。

フロアからはまず、入谷秀一会員が上記の議論を踏まえて、ホネットの欲望の社会化についての解釈についてややご都合主義的な、あるいは楽観主義的な傾向があるのではないかというコメントを示した。そもそもホネットとの論争においてホワイトブックが述べたのは、フロイトが論じた攻撃衝動を克服すると

いう意味での昇華は、ホネットが述べるほどポジティブに受けとめることができるのかという問いであった。ここで「内面が生き生きする」とされる社会化には強制的な身の振り方も含まれているはずであり、あらゆるパースペクティブを取り入れることについても、実際には承認してもらえるように、自分を合わせていかなければならないという意味で自己の液状化が起きていることが指摘された。

また、「レジリエンス」概念についても、流行しているものの、その由来を鑑みれば慎重に取り扱うことの必要性が三島憲一会員から指摘された。歴史家であり法律家であるジョゼ・ブルンナーによると、この概念はイスラエルの対パレスチナ戦略において、「道徳的な軍隊」のメンバーとしてのイスラエル兵士が、敵を殺す場合に罪の意識をいかに持たないようにさせることができるのかというアメリカの心理学者との共同研究のなかで生まれてきたという。

また三島会員は、ドイツの倫理学におけるカントの伝統にしたがって経験と基礎づけを厳しく分けることについて、実際には社会問題や労働運動が起きたときに、基準と程度についての判断を私たちはしているが、最初から明確にそれらがあるわけではなく、いわば最初に批判があって理由もあるが、基礎づけがい

つでも必要であるというわけではない、というコメントがなされた。

さらに訳者の一人でもある日暮雅夫会員は、本書の一章と二章で展開されるホネットのカント理解について質問を述べた。日暮によると、一章においてホネットはカントの枠組みにしたがっており、「啓蒙の道徳的成果に積極的に関与しようとしている人びと」は歴史過程を目的から整理して把握する参加者の視点を取るとしているが、二章では歴史において展開する、実質を伴った理性のコンセプトが語られている。この二つの議論のあいだに、不一致が存在すると考えられるが、はたして整合性はあるのか、という質問が寄せられた。

上記以外にもいくつかの質問やコメントがなされ、盛況のうちにセッションは終了した。これによって 2000 年前後からのホネットの転回について、概略を示すことができた。しかし、そうした転回がホネット自身の理論構築にどのように具体化しているのかについては、やはり彼の主著である『自由の権利』を精査する必要があることもまた浮き彫りになった。